

# 『女子月刊』をめぐって

## —1930年代中国におけるフェミニズム—

前山 加奈子

### 一.

中国の女性を対象とした雑誌等の定期刊行物に関する研究には、『新女界雑誌』『女子世界』『婦女雑誌』『玲瓏』『女鐸』『女青年（報）』『婦女週刊』『婦女園地』『婦女生活』『婦女週報』等をそれぞれ取り上げたものがある。当該分野の研究の進展は決して特記されるほどのものではないが、女性史や女性文化等の領域の研究が進むにつれ、史料的价值と共に研究対象そのものとしての存在が認められるようになった。そこには80年代以降の改革開放政策の実施以後、中国国内における図書館、資料館、檔案館等の公共サービスが徐々に開放的になってきたという背景がある。

今回取り上げる『女子月刊』に関する公表された専論は、管見の限りではない<sup>1)</sup>が、見落としている場合には、諸氏のご指摘をいただきたい。本論考では主として当該雑誌の編集方針と、かかわった編集者などとの関係をみていく。

### 二.

中国における多くの女性雑誌は、1920年代に女性問題に関心をもつ男性知識人によって、その政治勢力や思想背景を拡張強化することを目的として刊行された。そこには「婦女問題研究会」関係者による『婦女評論』『現代婦女』『婦女週報』『婦女雑誌』（1921～25年の時期）『新女性』という一つの系列を見ることができる。

そして「婦女問題研究会」によって刊行されていた『新女性』雑誌は婦女問題研究という時代性のある任務を終えたことを宣言して、1929年12月に終刊した。その時代性のある任務とは、主として男性視点による男性のための女性問題研究にほかならず、背景には「家」の中で如何に自主的に自立的に自分の意に沿った配偶者を選ぶかという問題意識が存在していた。民国も20年余りが過ぎると、五四の新文化運動や欧米の近代思想の受容を経て「家」を中心とする孝や節烈重視の倫理観が薄れ、男性の目指した「家」制度改革は、「性」観念の変化も伴い、男性にとっ

での女性問題研究に一応の区切りをつけさせた。

他方、それらの近代的解放や改革は、女性に新たな問題を突きつけた。「家」の中における存在から「家庭」「社会」における存在への意識変革は、単純な従属思考から複雑多岐な選択的思考を女性に求めることになった。他者として女性を問題視した男性は、女性のあり方を近代的様式・思想の中に見出すことができれば、そこで「研究」は終わりを告げ問題意識は他に移すことができる。つまり女性とのかかわりは、「個」「私」の感覚的世界へと移るために、もはや公の立場で論じる必要性を認めなくなる。

女性はその後主体者として自らの他者として論じられてきた生き方を新たに探り、現実の生活や社会の中で生きていかなければならない。新旧の入り混じるあらゆる場面で、実験的に選び取り、それを実践していかねばならない。意識的に「新しい女」となることもまた時代の流れの中で無意識のうちに新しい女になることも、女性に突きつけられたものは同じであった。

近代のはじめ女性たちの思いは、叫びから同胞への呼びかけに変わり、自分たちの声を集めて力を作ろうとして、新聞・雑誌を誕生させた。その後辛亥革命という政治の世界の中で民族問題と女性の政治参加や自立などが取り上げられた。1930年代に男性が女性問題研究から離れた前後、女性たちの中から新しい意識を持ってメディア界へ進出したグループが見出される。それは女性の生き方の背景に社会をとらえている『婦女園地』『婦女生活』『上海婦女』『職業婦女』という系列であった。また別の系列に『女声』『女子月刊』があり、さらに『婦女文化』『婦女共鳴』から『婦女新運』に続く国民党婦女部を中心とした系列が見られる。これらの系列は数多い女性雑誌のなかで幾筋か認められるものだが、私的存在として個として如何なる生き方を選択するか、公的存在として社会や国家との如何なるかかわり方を選択するか、その選択の仕方によって、同質の刊行物が時間の流れの中で系列を形作っていった。

最初に挙げた、男性の手による「婦女問題研究会」の『婦女雑誌』のある一時期及び『新女性』については、拙稿<sup>2)</sup>を参照されたい。それらは社会変革を視野に入れたジャーナルといえよう。本論考では主として『女子月刊』にかかわりのある人物を取り上げ、その内容と傾向を探る。

### 三.

『女子月刊』は1933年3月8日<sup>3)</sup>に姚名達・黄心勉夫妻によって創刊された。その創刊「目的はただ世の中の女子のために、言論発表の播音機（拡声器）をつくり、知識を獲得する材料庫（資料館）を建て、精神を休ませる大きな公園を開いてあげること」であった。かれらは、政治・宗教・経済的背景をもたなかったため、当然それらからの援助・干渉はなく、また「金儲けの企てもなかった」（1：1「発刊詞」）。ではなぜ「純粋に」女性雑誌の刊行をしたのか。まず姚名達の経歴と人となりを見てみる。

姚名達は自らについて次のように述べている。

「私は若いころから歴史研究が好きで、現在までずっと歴史研究の仕事をしてきた。私は農村社会から育った貧乏人で、現在までずっと貧乏だ。そしてやはり農夫のように愚かだ。

私は女の人に同情する人間で、現在までずっとやはり女性解放に従事している。私は孤独癖で友はなく話も下手、応酬できない人間で、現在までずっと私を真に理解し真に助けてくれる人もいない。

（だが）私は社会が私を必要とし、国家が私を必要としていると思って、常に心を奮い立たせ、努力している。しかし個人の力は弱く、社会の環境は劣悪すぎる。そこでいつも失望落胆し、いつも悩み、いつも死にたいと思っている。」（2：4「我為的是什麼」『心勉偶存』所収 pp.111～112）

この文からは姚名達の悲観的な人生観しか窺えない。しかも『女子月刊』刊行後、「最近友人からは婦女の忠臣、男子の漢奸と言われている」（同上）という。また「別の友人からは歴史研究を犠牲にして、わけのわからない婦女運動をしているのはなぜなのかと訊ねられたりもする」という。姚名達は本来の仕事である歴史研究をないがしろにし、「男子の漢奸」といわれるほどのフェミニストなのだろうか。

姚名達は1905年3月17日、江西省興国で生まれた。祖父は農民であったが、父親の舜生は科挙を受けて秀才となり、後小学校などの教員となる。姚名達は「半耕半読（農業をしながら勉強をする）」の生活の中で歴史に興味を持って中学時代までをすごしたが、民国14（1925）年国立清華大学研究院に進学し、歴史の専門研究に入った。3年間古代史の研究をし、胡適や梁啓超の著作を手伝ったが、「満足感

なかった」。その後、上海の商務印書館の編集者となる。3年間の商務印書館での勤務中、日本軍の爆撃によって新しい自宅が焼失され、同じ時に商務印書館も社屋と図書館を日本軍に焼かれた。姚名達は住まいも仕事も失った。それだけでなく、彼はその前年に「郷里の家を共産軍によってこわされた」という体験をもっている。

その当時彼が気づいたことは、「個人と社会国家は最も密接な関係にあること。つまり国家の安全危機、社会の治乱は直接個人のみに影響すること、個人の安寧を望むのなら、国家を保衛し、社会を安定させる仕事に参加しなければならないこと」であった。彼のそれまでに選んだ「古代史研究は、現代の国家社会に少しの貢献もしない」。国家社会に申し訳が立つように、手元にある数千元を元に、「民衆を呼び覚ます運動をしよう。」「勇ましい政治運動」ではなく、「人がしないこと」をしなければならない。「日頃婦女の生活や歴史に対して研究したいと思い、彼女たちの痛みに対しては同情していた。」

そこで婦女を呼び覚ます「拡声器」とする女性雑誌の刊行を思いつき、その実現のために、代理発行所としての女子書店設立に至った。それはあくまでも「金儲け」ではなく、「民衆を呼び覚ます」ためであった。女子書店という出版社創業の動機は、「純潔」で、すべて「一種の興味」からであり、「一種の欲望」からではない。「人のためを思ってであって、自分のためを思ってではない。」書店(出版社)経営は「自分の生計のためではない」ので、「夜の余暇時間を利用して妻を助け、無償奉仕で少しばかり社会国家に有益な仕事をしよう」としたのであった。

姚名達は商務印書館では万有文庫の編集者として勤務していた。当時、同社刊行の『婦女雑誌』の編集はすでに章錫琛から楊潤餘に換わっていた(この時期の『婦女雑誌』に関しては論文集『『婦女雑誌』からみる近代中国女性』を参照されたい)。楊との関係について詳細なことは不明であるが、商務印書館内の編集業務上で知り合ったことは確かであろう。

姚名達は民国18(1929)年10月3日に、なぜこの日付なのかは不明であるが、女性問題に関心をもつようになり、「女子に歴史がないため、自分に対して認識することができない。女子専用の図書館がないために、実用的な知識を得る方法がない」と感じ、「女子図書館」の創設と「婦女中国史」の著述を計画、そのために数千冊の女性関連の書籍を購入していた。

民国20(1931)年2月2日に、姚名達は楊潤餘から婦女運動を「指導する」論文を依頼された。同月12日に承諾の手紙を出したが多忙だったため、妻の黄心勉に代筆させた。それは「中国婦女的過去和将来」という原稿になって、『婦女雑誌』第

6巻第4号と6号に掲載された<sup>4)</sup>。1932年1月28日、日本軍の爆撃によって、商務印書館の社屋と社の東方図書館が焼失した際、同時に姚名達個人が買い集めた書籍と「婦女中国史」の原稿及び史料が自宅とともに焼かれてしまった。

その後は、私立復旦大学や国立暨南大学で歴史を講じて生計を立てることになったが、そのような時に「姚黄心勉」は次のような感慨を得て『女子月刊』の発刊に思い到ったことを書き残している。

日本軍の爆撃の中で、数多くの「小さな足の女性（小脚婦人）」が不自由な足で子供を連れ荷物を背負って、泣きの涙で逃げ惑う様子に心を痛めた。しかし租界の劇場やダンスホール、レストランには、依然として「国破れ家亡ぶ禍」を知るものは何人もいなかったのである。国家社会のためにどうすればその混迷から呼び覚まし、愚かさを啓発し、衰弱を強健とし、国家を振興し、社会を安定させることができるのか。（1：2「女子書店の第一年」p.128）

妻の黄心勉（1902年6月12日～1935年5月4日、享年33歳）は江西省興国県に生まれる。幼名を瑞姑、長じて邦瑞といい、字は慕琰。母の王太夫人は同県の出身で、「文字を知らなかったが、子女の教育を良くした。慈愛深く和やかで、質素儉約し、ふつうの裕福な家の主婦とは違っていた。」父の黄家衛は油や塩の販売運搬業に失敗して資産を失い、肺結核で病死した。心勉が12歳の時であった。

興国県は山の中で「車馬の利」もなく、溪谷の水深は浅いため「船や筏の利」もない辺鄙な所であった。民国成立後の教育制度の改革で県立女子小学校が創設されると、黄心勉は初めての入学・卒業生となった。当時江西省には女子の入学できる中等学校は遠い南昌にある女子師範学校のみで、経済的にも弟妹のいる状況では、勉学を続けることはできなかった。そのころ姚名達は県立中学の2年生であったが、二人を紹介する教師がいて1920年11月に結婚した。

1924年、姚名達が清華大学研究院に進学したとき、近くに省立女子師範学校が新設された。すでに一男一女がいた黄心勉だったが、姚名達の父親が教職員を勤めていたことから進学することができた。しかし子供たちが次々に病気にかかり、黄心勉は学業を放棄せざるを得なくなり、家に戻ったが、その甲斐もなく二人の子供を失ってしまった。その後新たに省立第2女子中学に入学できたが、再び出産のために休学し、復学した時には北伐軍が来て休校となってしまった。

黄心勉にとって出産という「個人的事情」のジェンダー役割と政争という国家の

状況とに大きく阻まれ、中高等教育を受ける機会を失ったのだった。これらの状況が、彼女に女性のための教育文化環境を準備し完備する必要性を、強く認識させたのであろう。

北伐後、姚名達が上海で商務印書館の編集職に就き、1929年の春に黄心勉と子どもたちは上海に移った<sup>5)</sup>。

姚名達・黄心勉夫妻は弟の黄邦俊とともに、「言論から同胞を呼び覚まし、知識から女性を啓発させること」にし、女性雑誌『女子月刊』を出すこととなった。3月20日、南京路冠生園に友人たちと集まり、有限会社「女子書店」を設立。姚名達の名義で原稿料を貯めた準備金で4月1日円明園路29号に社屋を設けた。毎週準備委員会を開き、10数人が提案、討論して経営の準備を進めたが、手狭になり、9月18日には霞飛路銘德里8号に移った。(後、葉恭綽の経済的援助を受け、翌年5月17日に霞飛路523号のさらに広い家屋に移った。)

『女子月刊』の編集はもとより原稿料も出さず、すべて無償奉仕を趣旨とした<sup>6)</sup>。そして「それは『女子月刊』が生存発展する一要素となった」のである。

女子書店創設の趣旨は、

「女子の作品を発表し、女子の読み物を提供すること。少し格好よく言うと、女子教育を補佐し、婦女運動を促進すること。婦女の知識を開発して、人類文化を引き上げること。詳しく言うと、婦女問題を討論し、婦女の歴史を研究し、婦女の能力を発揮させ、婦女の職業を提唱し、社会の悪い風俗を正し、家庭生活を改良すること。簡単に言うと、つまり婦女のために知識的サービスを行うこと」(黄心勉「女子書店の第二年<sup>7)</sup>」)

であった。

女子書店の経営準備に関しても、やはり「女子書店の第二年」で黄心勉が次のように述べている。

女子書店は有限会社とはいえ卞鐘俊が一度500元を出した以外は多額の出資はなく、多くは10元20元という小額であった。「各個人が稼いだ給与」を頼りに印刷出版したのであった。編集業務に関しては、姚黄夫妻がすべてを引き受けて行ったが、間に合わず、姚名達は11月に教職を辞めた。黄心勉は最初の1年間、家事育児も含め使用人も雇わずひとりでごなした。しかし、現実に編集作業など煩雑な仕事量も多くなり、黄心勉一人では担いきれず、発行業務に男性一人を雇い、さらに女性3

人を雇うことにした。

このような夫妻の多忙な生活には女性読者からの同情を得たが、有能で自主的に動ける女性は見つからず、二人は女性の人材不足、女子の職業の前途は決して樂觀できないことを知ったのであった。

#### 四.

『女子月刊』の発刊準備に集まった人の中に「曾」という女性がいて、彼女は雑誌の傾向を左寄りにしなければ「時代遅れ（開倒车）になる」「時代に逆行する」と主張した。大多数の者は彼女の意見に反対し、賛成したのは少数だったが、意見が分かれ、その結果、一部の左寄りの人は退出してしまい、その後準備会は開かれなくなった。発起人の認定した株も集まらなくなった。そこで仕方なく黄天鵬の勧めに従って姚黄夫妻だけで準備を進めることになった<sup>8)</sup>。

「左寄り」になることを警戒した姚名達と黄心勉の方針は、また「右寄り」になることも警戒した。それは彼らにとって最も主張したい趣旨だったのではないだろうか。政治的に中立であること、或いは政治にかかわらないことを、黄心勉は次のように説明している。

「我々のところには左寄りの共産黨員或いは右寄りのファシストはいない。そのため某種の主義の宣伝をしたりはしない。しかし…多少は政治的な意味を除くことができないことがあったとしても、それは避けられないが、…決して一方に偏しない。

大多数の民衆、特に大多数の婦女の福利を守り、左傾しすぎず、また右傾しすぎないように、政治を多く語らず、時には語らないわけにはいかないが、主義はもたない。もしもつとすれば、女権主義（Feminism）である。」（「我々の態度<sup>9)</sup>」）

政治色をもたないこととフェミニズムを掲げて『女子月刊』は、当時の「家の外」に目を向けた女性にとって、記念すべき3月8日の「国際婦人デー」の日に出発した。創刊号の内容と執筆者は次の表[1]に明らかである（表中の\*印は無署名を表す）。

創刊号はこのような目次で、図版（表紙及びグラビア）、発刊のことば、婦女問題講座、女論語、恋愛問題講座、文芸境界、現代婦女生活、女子体育講座、女子衛生講座、女子実業講座、女子工芸講座の各欄があり、その間に諷刺画と特載欄がと

表[1]

類別	題名	作者
圖版	黑雲散了明月出來了	劉雪亞女士(封面)
圖版	農婦在播種了	汪長霖先生(鉛筆畫)
圖版	不朽(獻給抗日陣亡諸將士)	L.LONGEPIED(雕刻)
圖版	汪公子	方君璧女士(油畫)
圖版	吳彩鸞小楷書四聲韻	故宮珍藏真蹟
	發刊辭	本社全人
婦女問題講座	中國今日所需要的婦女	待名女士
婦女問題講座	現代中國需要那種女子	呂雲章女士
婦女問題講座	勿傷慈心	馬相伯先生
婦女問題講座	女子教育之重要	潘公展先生
婦女問題講座	誰是罪惡的製造者	申報
婦女問題講座	請製定女子制服書	中國布衣會
婦女問題講座	世界之進步須由女性分任之	愛因斯坦博士
婦女問題講座	婦女運動的意義	呂雲章女士
婦女問題講座	三八婦女節與女子月刊的誕生	金仲華先生
女論語	形形色色的救國方法	獨石女士
戀愛問題講座	我的“戀愛”談	張仕章先生
戀愛問題講座	一封血淚書	景春女士
戀愛問題講座	小姐須知	黃鶯女士
文藝境界	情波(短篇小說)	盛靜霞女士
文藝境界	婚夕(中篇小說)	激
文藝境界 詩	愛的跳舞, 雜詠, 再會, 頌歌, 春天的呼聲	(印度沙羅提尼奈都夫人作) 周學普先生譯
文藝境界	齊宮怨	朱石白先生
文藝境界	江南婦	王冕先生
文藝境界	女耕田行	戴叔倫先生
文藝境界	別爹爹	陳瑩女士
文藝境界	故鄉	英俠女士
文藝境界	雪	王劍敏女士
文藝境界	何處是我的故鄉	張藍霞女士
文藝境界	誰知	張藍霞女士
文藝境界	飄搖的心	張藍霞女士
文藝境界	寸鐵	(拉·羅西夫可著) 陳秋子女士譯
文藝境界	黃昏	陳王白女士
文藝境界	女工零拾	陳漱琴女士
現代婦女生活	愛的結合自述	黃警頑夫人柏靜如女士
現代婦女生活	西北災情與蘭州婦女(特約通信)	林鵬俠女士
現代婦女生活	林鵬俠講演航空	*
現代婦女生活	現代日本的婦女生活	朱鴻禧先生
現代婦女生活	日本女學生軍事化	*
現代婦女生活	日本婦女團體的愛國運動	*
現代婦女生活	日本有所謂婦女國防會	*
現代婦女生活	軍閥的恩賜	*
現代婦女生活	女春秋	*
現代婦女生活	自由快樂的蘇俄女子	百新先生
現代婦女生活	英美女店員的氣習	百新先生
女子體育講座	矯正姿勢的女子體操	百新先生
女子衛生講座	便秘是女子健康美上的勁敵	百新先生
女子實業講座	女子與養蜂	曹雲鵬先生
女子工藝講座	小孩睡衣縫紉法	單以純女士
諷刺畫	這是我們的職業嗎	*
諷刺畫	救濟東北難民杯舞大會之夜	*
諷刺畫	出席婦孺救濟會之前	*
特載	本社懸賞徵文	*
特載	預定本月刊辦法	*
特載	本社徵求交換雜誌	*
特載	本社歡迎投稿	*
特載	本社徵求文稿簡章	*
特載	本社簡章	*
特載	女子獎學金章程	*
特載	女子圖書館章程	*
特載	本社特約作家	*

ころどころに挿入されている。

記念すべき表紙は、雲間から出た大きな名月が描かれたもので、雲は旧社会、名月は女性を象徴しているものだろう。題字は後述する馬相伯による。

発刊の辞は前述したように極めて簡潔明瞭に掲げられている。

婦女問題講座の執筆陣には、呂雲章、馬相伯、潘公展、金仲華と並び、また現代婦女生活欄には、柏静如、林鵬俠、朱鴻禧、百新と並んでいるが、この2つの欄が創刊号の目玉だといえるだろう。創刊号の執筆者について、特に次の人物について紹介検討する。

「婦女運動の意義」の呂雲章（1891～1974）は当時、北平婦女救国同盟会主席。江西省南昌に生れるが、生後1ヶ月で父親が死去し、母親、兄姉と共に郷里の山東省福山県に帰る。幼い頃から母親や叔父に唐詩や古文を習う。民国初年に北京の私立女子法政学校に入学、後国立女子初級師範予科に進む。五四運動では山東の同郷と青島奪回運動を組織して学生代表となる。卒業後小学校の教員になるが、1921年前後に国立女子高等師範国文学系に入学、クラスメートに許広平がいた。25年中国国民党に入党。女子高等師範卒業後、平民中学で国文を教えながら北京市国民党婦女運動委員会委員となり、婦女之友社を組織して雑誌『婦女之友<sup>10)</sup>』を編集する。後、上海特別市党部婦女部秘書。女工のための補習学校を作り、また上海婦女聯合会を組織して、『革命的婦女』を創刊（1927年6月～同年8月、11月～12月の数ヶ月間刊行）。28年浙江省国民党婦女運動の責任者となり、29年には南京で開かれた国民党第3回全国代表大会に出席し、男女平等の教育について提言。31年の九一八事変後、婦女救国同盟会、婦女救護訓練班を組織する。一二八事変後、『華北婦女』週刊を創刊して婦女界を救国に奮起させる。以後河北や安徽で当時としては稀有な女性の督学として教育界の仕事に従事し、37年立法委員。38年には国民政府と共に武漢、重慶に移り四川で婦女運動工作をする。40年国民参政会参政員、45年国民党中央委員、46年以後憲法制定を討議する国民代表大会へ出席して女性代表の枠を提案し可決されて、「憲法第134条」に入る。

呂雲章と『女子月刊』との関係は、国民党の女性運動指導者として原稿依頼されたものであった。「女子書店から文章がほしいという手紙が来て、仕方なく副刊に載せたものを集めて」『婦女問題論文集』として1933年4月に出し、また夫の周書翰の手助けの下に『世界婦女運動史』（1935年1月）も出した<sup>11)</sup>。

呂雲章はJ.S.ミルやベーベルの女性論を引用して望ましい女性像を述べた後、婦女運動の意義について次のように説明する。

「本党（国民党）の最終的な理想は平等と自由である。婦女は弱小者，被抑圧者であり，最も平等と自由を望んでいる。そのため本党の精神は婦女運動の精神と一致している。」

「本党が女権を提唱し，至れり尽くせりであるが，本党及び党外の共感する同志が適切に実行するよう深く望む。そして婦女界は本党が唯一の救いの神であることを知り，この革命勢力に参加して，直接には共通の出路を求め，間接には自身の目的を達すべきである。」

馬相伯は本誌の題字を書いた人<sup>12)</sup>で，当時すでに94歳だったが，掲載された文章は「景」による談話録である。現代女性の職業問題について次のように述べている。

婦女に適した職業は体力を使いすぎないもの，危険性のないもの。公共社会の仕事は婦女に充当されてないが，学識や才覚を採否の基準とすべきである。工場労働は国家が特別法規を定めて，人権上の保障を尽くすべきである。万一戦いになると男子は兵士となり，女子も看護などの責任をもたねばならない。女工が侮辱されることを減らすようにしなければならない。

潘公展は当時上海市教育局長で，版元の女子書店に來訪したりする人物であった。掲載文は上海女子中学の開学時に講演した女子教育についての概略で，次のような内容である。

現代に適した女国民になること。女国民たる任は男子を超えるときがある。それは中国に一人のすぐれた女子がいれば，数人のすぐれた子女を育てることになる。その関係は国家民族にとって極めて大きい。十分な常識を持つこと。刻苦して修養し，身体の鍛錬に努めること。

「三八婦女節と『女子月刊』の創刊」を載せた金仲華（1907～1968）は，21歳で商務印書館に入り，23歳の時に葉聖陶の推薦で『婦女雑誌』の編集主幹となった。金は後年，国際問題に関して多く新聞雑誌で著述を發表したが，当時は編集業務に携わりながら『婦女雑誌』に世界各地の女性運動や女性のおかれた社会状況を紹介・解説する文章を多く書いていた。1932年上海事変によって商務印書館が焼失した後は，『婦女雑誌』は再び世に出ることはなく，金仲華が最後の主幹となった。以後，商務印書館における女性関連記事は『東方雑誌』（第29巻第4号から）の「婦女と家庭」欄に移り，実質的には縮小されたことになる<sup>13)</sup>。

金は1932年12月に商務印書館から単行本『婦女問題』を出し，翌年7月には女子

書店から『女子談藪』を出している。金と『女子月刊』を結んだのは、他にもない姚名達が同社の万有文庫の編集部に居たことだろう。「談藪」という名前は金が『婦女雑誌』の「談藪」欄を執筆担当していたことに由来する。

彼の「女性問題研究の特色は、ある一方面或いはある問題に限らず、中国女性の命運を国家興亡という大方向から着手している<sup>14)</sup>」ことである。女性の力は国家・社会にとって必要だという認識の下で、中国の現状が政治経済において危険な状態にある外、社会文化面に対しても非常に危機感をもっている。彼は『女子月刊』の創刊に当たり、その発刊日が3月8日の国際婦人デーであることから筆を起こして、その日の由来を説明する。また2年後に沈滋九によって創刊された『婦女生活』にも「現段階の中国婦女」という文章を出している<sup>15)</sup>。『婦女生活』との関係は、その版元の開明書店にある。上海事変後、金も姚名達と同様、商務印書館の社内編集者ではなく、社外での編集者として仕事を請け負うことになる。そのため金は葉聖陶の開明書店に、その後入ることになったのであるが、開明書店からは『婦女問題の各方面』を出版した<sup>16)</sup>。

また「現代婦女生活」欄に執筆している「百新先生」とは、商務印書館で編集をしていた蕭百新のことである。女子書店から『アメリカ女優の日記（美国女優的日記）』を出した。

女子奨学金や女子図書館の設立を試みた点は、別途特筆すべきことであるが、此処では紙幅の都合で触れない。

## 五.

『女子月刊』の編集業務に携わった者は、姚名達と黄心勉のほかにも多くのスタッフがいたわけではないので、あえて主幹という必要もないだろう。ここでは編集者としておく。1933年3月の創刊に当たって編集業務を担ったのは黄心勉一人であった。彼女の本誌における著述は下記の表[2]の通りである。

黄心勉は女子書店の経営に対して、女性である自分自身が行うのは勿論のこと、女性同胞が自主的、積極的に協力してくれることを切望していた。それは他でもなく社会における女性の能力を「外」に顕示するためでもあった<sup>17)</sup>。その黄心勉の願いは、同時に経営方針でもあったと言えよう。しかし家庭内の家事、育児とともに編集業務も一手に引き受けて、いよいよ悲鳴に近い助けを求める声をあげた時、郝李芳という若い女性が黄心勉の前に現れた。黄心勉は感謝と感激の念を強くして1：

表[2]

筆名	発行年月日	巻期	類別	題名
姚黃心勉	19330400	1.2	特載	女子義務函授學校章程
姚黃心勉	19330400	1.2	特載	一年來之女子書店
心勉	19330815	1.6	卷頭語	我們的前途
心勉	19330915	1.7	女子新聞	本社充實戰鬪力
心勉	19331015	1.8	社論	我們的希望
心勉	19340115	2.1	卷頭語	舊的支票和新的支票
心勉	19340310	2.3	編者的話	我們在夾攻中
心勉	19340515	2.4	婦女問題	新婦女運動與新生活運動
心勉	19340515	2.4	婦女問題	新婦女與新生活運動
心勉	19340515	2.4	特別記載	夾攻中的自白
心勉	19340515	2.4	特別記載	女子書店的第二年
心勉	19340901	2.9	婦女問題	中國婦女將來如何
黃心勉	19340801	2.8	偶然附錄	自殺之一 王錦雲(女)
黃心勉	19350310	3.3	二週紀念	女子書店的第三年
黃心勉	19350401	3.4	婦女問題	中國婦女應向那兒跑
黃心勉	19350401	3.4	婦女問題	現代中國婦女的急務
編者	19330400	1.2	卷頭語	我們的態度
編者	19330715	1.5	卷頭語	我們的悲傷和惶惑
編者	19330815	1.6	卷頭語	編輯以後
編者	19331215	1.10	卷末語	年終致辭
編者	19341001	2.10	卷頭語	編者的報告
編者	19341001	2.10	女性的吶喊	女性的愛美是不是婦運前途的阻力
編者	19341101	2.11	幾點小消息	
編者	19341201	2.12	卷頭語	報告與介紹
編者心勉	19350101	3.1	卷頭語	新年的展望 微笑的期待

6から郝李芳に編集業務の半分を委ねた(1:6, P4)。

郝李芳の方も引き受けたのは「婦女大衆の解放事業のため、最大の真心でもって、婦女運動戦線で苦勞している同志の任務を分担したいからだ」と述べている<sup>18)</sup>。郝李芳の編集は以後9期まで、つまり4ヶ月続いたが、10期(1933年12月刊行)は黄心勉に戻っている。その間の状況の変化について判断する資料を持たないが、6期から9期の誌面の内容を見ると、ベーベルの訳述などいわゆる「左より」の女性論が散見される。これは郝李芳の編集方針によるものと考えてよいだろう。ベーベルのほかに、胡楣(関露<sup>19)</sup>)の「ソ連婦女と児童の幸福」(1:9)がある。また郝零星、郝玲星は郝李芳のペンネームか否か、現段階では確定できないが、発音の類似

した文字を使用しているところから彼女のものと考えられる。また郝李芳の編集期間にのみ、その「左より」の女性問題に関する掲載がある。(表[3]を参照)。

郝李芳は編集を担当する以前に一読者として、『女子月刊』の「同声」は自分の「同情」を引き入れてしまった、という感激の手紙を出し、「自分の力をあらゆる面で尽くしてあなた方について行きます。」「女子の読み物を作るのなら、各国の婦女の状況に関しては紹介すべきですし、特にソ連の様子は注目すべきです。その政体が如何であれ、ソ連の婦女解放は一つの事実なのですから」と書き、レーニン夫人クループスカヤの「ソ連婦女の解放」を翻訳掲載してはどうかと提案した。それに対して編者(黄心勉)は次のような返信文を載せている。

「本書には政治的な背景はないが、国際婦人デーに創刊したため、共産党の機関誌と疑われているかもしれない。中国には特定された婦女デーがないので、3月8日の国際婦女デーを借りたに過ぎない。その日は第三インターが決めたものだが、我々は第三インターの命令を受けて創刊したのではない。中国人はソ連という共産党を連想し、少し左傾したりソ連の2字を好意的に言ったりすると、共産党の嫌疑を免れない、雑誌の作りにくさの一因になっている。」「私たちは、婦女は解放でき、解放後に独立するということを考えているだけで、その他の政治問題社会問題は問いたくない。もし本書の同人はどんな色かと問われたなら、全くの無色の、灰色でもない、人間だ。中国共産党と日本帝国主義者に2度家を壊された教訓から、彼らの走狗とはならない。しかし個人の関係から日本やソ連を語らないわけではない。それゆえ女士の訳著を歓迎する。」(1:2, p.142~143)

そして郝李芳の訳文は第1巻第2期の目次に大文字で記載され、本文は6ページにわたって掲載された。後日編集者として郝が扱ったなかで1:8が検閲にかかった。原因は「階級闘争」という字句があること(「ベーベルの婦女観」p.19)だったが、このために『女子月刊』は休刊に追い込まれた。それに関して黄心勉は被害者の感情で郝李芳の人となりと考え方を非難している(2:4「夾攻中的自白」)。官憲の検閲を受けた精神的打撃によると考えられるが、また一方では彼女の女性主義がとにもかくにも左にも右にも偏しない、「純潔」「精粹」を目指し、それを保持すること(2:1「舊的支票新的支票」p.1647)にしか主眼が置かれていない表れだといえる。

その後第1巻第10期(1933年12月)から2巻8期(1934年8月)まで、黄心勉が

表[3]

筆名	発行年月日	巻期	類別	題名
郝李芳	19340315	2.3	批評與希望 (読者の話)	不幸的誤會
郝零星	19330515	1.3	現代婦女生活	日本勞苦婦女的解放與無神論運動
郝玲星	19330715	1.5	婦女問題論文	婦女運動の本質
郝玲星	19330815	1.6	女子論壇 (婦女問題講座)	婦女解放的意義
郝玲星	19331015	1.8	廣泛的婦女問題	布爾喬亞婦女運動的批判
郝玲星	19331215	1.10	婦女問題	動盪中的中國婦女
郝零星女士	19330400	1.2	讀者通信	我將盡我的力量在一切方面追隨你們之後
郝零星女士	19330400	1.2	現代婦女生活	蘇聯婦女的解放(譯)
郝玲星	19340115	1.9	婦女問題	婦女的教育問題

再び一人で編集を担うが、1934年9月にアモイから『女子月刊』の熱心な読者であった陳媛（本名は陳淑媛<sup>20)</sup>）が来て編集を引き受けることになった。彼女は鼓浪嶼慈勤女子中学時代から作品を発表していたが、封建的な家庭を出て来たのだった。編集を受け持ったのは第2巻9期から第3巻12期（35年12月）までであるが、陳媛はいくつかのペンネームを使っている。表[4]のように、編集関連の文章では陳媛又は陳媛で、文芸関係の著述では白冰又は陳淑媛でそれぞれ署名している。

また陳媛が編集を担っていた内の第3巻1期から8期の間、婦女協進会<sup>21)</sup>の金光楣が編集業務を援助している<sup>22)</sup>。

1935年2月黄心勉は過度の疲労による身体衰弱から結核を発症し、療養に専念することを『女子月刊』（3：4）誌上で報告したが、次号には彼女の逝去を知らせる陳媛の記事がある。

黄心勉の死後、その女子書店の経営業務を引き継いだのは若い社友の趙清閣であった。

趙清閣（1914～1999）は河南省信陽で生まれ、民国21年（1932年）18歳の7月に開封の高級中学を卒業後、河南救済院貧民小学校で教員となった。同時に河南大学での聴講を許され、後年作家となる姚雪垠と同級になった。趙清閣はこのころすでに『河南民報』に原稿を書き、また『新河南報』副刊「文芸週刊」や『民国日報』の副刊「婦女週刊」や「她」の責任編集（主編）もしていた。話劇のシナリオは、当時河南大学で教えていた作家の葉鼎洛に文才を認められて、やはり同年開封の新聞副刊に始めて発表した。翌33年19歳で新詩を発表<sup>23)</sup>、作品を『女子月刊』に発表

表[4]

筆名	発行年月日	卷期	類別	題名
白冰	19330815	1.6	文藝境界 (劇本)	宿舍小景
白冰	19330915	1.7	短篇小説	張伯伯的嫁女
白冰	19331015	1.8	劇本	滾
白冰	19331015	1.8	新詩	她 嚮懷 黃葉
白冰	19340115	1.9	婦女問題	談談現代女子
白冰	19340115	1.9	文藝境界 新詩	寂寞的夜 白鴿 心的悲哀 秋之晨 母親來了
白冰	19340215	2.2	詩	姑娘啣
白冰	19340801	2.8	中學生日記	鄉村裏的片段
白冰	19340801	2.8	文藝 劇本	賊
白冰	19340901	2.9	婦女問題	青年男女間的友誼
白冰	19341201	2.12	女性的吶喊	解放與參政
白冰	19350609	3.6	傷心之頁	勉姊啣, 歸來
白冰	19360410	4.4	劇本	最後關頭
白冰	19360601	4.6	劇本	女性之羣
白冰	19360710	4.7	劇本	女性之羣 (續完)
白冰	19370515	5.5	心勉兩週年祭	告訴您——勉姊
白冰	19340701	2.7	文藝境界 (詩)	村落中的鐵匠 (譯)
陳淑媛	19330615	1.4	文藝境界 (詩)	前線的戰士們 月夜的琴
陳淑媛	19330715	1.5	讀者通訊	理想的雜誌竟實現了
陳淑媛	19330815	1.6	文藝境界 (詩)	獻給慈愛的母親
編者陳爰	19350201	3.2		編者的話
陳媛	19340901	2.9		此後的希望
陳爰	19350310	3.3	二週紀念	女月兩週年
陳爰	19350501	3.5		關於女月
陳爰	19350609	3.6		不幸的消息
陳爰	19350801	3.8	卷頭語	女月的新姿態出現
陳爰	19350900	3.9	編餘	
陳爰	19351000	3.10	編餘信箱	
陳爰	19351100	3.11	編餘信箱	
陳爰	19351200	3.12	編餘記要	
陳爰	19351200	3.12	信箱	
陳爰	19360308	4.3		致女月讀者
陳爰	19360504	4.5	心勉週忌紀念祭	致勉姊

し始めた。同年9月には『女子月刊』の特約選考員になる。

勤務先の貧民小学校で、貧困層の苦しみや貧しい孤児たちに触れ、社会における貧富の格差や女性解放、貧困児童の教育などについて自分の考えを文章にして発表した。しかしこのような「幼稚さを帯びた正義行為」は、勤務先の救済院の一部の人の怒りに触れ、危険分子とみなされて解雇されてしまった。その後『民国日報』の「婦女週刊」からも編集の仕事が解かれた。当時の趙清閣は開封の「閻の勢力」に抗い、その目は遠く、『女子月刊』に作品を発表し始めていた上海に向かっていた。趙清閣は『女子月刊』第1巻7号(1933年9月15日)のグラビアに「社友趙清閣」としてその姿を現した。同時にこの号で黄心勉が次のように第8号から大改革、大拡充をして、戦闘力を充実するために特約選考員の名前を発表している<sup>24)</sup>が、その中には趙清閣の名前も見える。

謝冰心	黄廬隱	謝冰瑩	温志良	王国秀	高曉蘭	楊潤余
馮沅君	郝玲星	黄素寬	陳玉白	林鵬俠	譚蕙菁	錢瓔
趙蘇琴	余志雄	胡廷璧	趙清閣	陳叔媛	白冰	貞麗
麗倩	李明蘇	倪淑鐘	周藹華	梁惠蘭	吳松英	俞芳
梁暉	孫雯君	柏靜如	李耐	沙韻月	陳錫霞	陳国英

諸位女士

以下男性メンバーの名前(省略)

女子書店は『女子月刊』以外に「女子文庫」という叢書を出していたが、その編集責任者も黄心勉で、若い学者や文学者たちが編集委員会を構成した。そこに趙清閣が加わり、黄心勉が急逝した後は、委員会の全会一致で彼女が黄心勉の後を継いだ。その一方趙清閣は1933年11月から上海美術專科学学校芸術教育系の2年に編入し、西洋画を専攻した。同校は劉海粟が私費を投じて設立した中国最初の私立美術学校であったが、高い授業料のために趙清閣は新聞や雑誌に投稿して原稿料を稼がなければならなかった。その内、天一電影公司の『明星日報』の宣伝の仕事は、彼女の生活を支えたばかりでなく、洪深、欧陽予倩、応雲衛、王瑩、陳凝秋、袁牧之といった進歩的な映画人、演劇人と知り合うことができた。その後上海美術專科学学校の文芸娯楽活動で田漢の「コーヒー店の一夜」を取り上げた際、應雲衛から田漢を紹介してもらった。さらに1934年春には、左明と魯迅に会う機会を得、許広平とも語り合い、その後の趙清閣の人生観につながったのだった<sup>25)</sup>。

35年6月、短編小説『旱』を発表。女子書店から出版したが、その他の小説も社会の暗部をついたものだったため、初版で即出版禁止となった。しかしすぐ別の新興文学社から出版された。36年7月上海美術専科学校を卒業後、母校の開封芸術高級中学に就職した。21歳の若さで上海の左翼作家連盟の作家たちの影響を受けた趙清閣の筆先からは、社会の裏で苦しむ女性たちが次々と描かれ、醜い社会現象を作り出す元凶が暴かれた。そのため地元の国民党政府に目をつけられて家宅捜査を受け、田漢の手紙や『資本論』を押収されてしまった。その結果共産党員の嫌疑をかけられて半年間投獄された。

獄中で結核になり、父親の尽力で保釈出獄した。再び上海へ行って「女子文庫」の編集に就いたが、この「体験」を知った姚名達は、「『女子月刊』を守るために」趙清閣を「解雇」した。それは捜査を免れるためというより、姚名達の掲げる「左よりでない」ことを貫くためだったといえよう。趙清閣はそのため南京へ行き、8月には旧友の楊郁文と共に、月刊『婦女文化<sup>26)</sup>』を創刊した。

次の表[5]は、趙清閣が『女子月刊』誌上に発表した著述である。詩、小説、散文など文芸もの以外に女性問題に関連するものも見られる。

趙清閣が南京へ行った後、第4巻の9期と10期は封禾子が編集している。

封禾子（1912～）は本名を封季壬、ペンネームに鳳子を使った。湖北省武昌の出身、上海の復旦大学卒業後、33年から復旦劇社に参加、37年に日本で曹禺の「日の出」を演出、また女優としても評価が高い。雑誌編集者としては『女子月刊』以外に『人間世』の編集主幹、49年以後は『北京文芸』の編集や『劇本』の編集主幹になり、また多くの演劇評論も書いた。『女子月刊』には次のような文章が見られる（表[6]）。

「晚清“社会婦女活動”剪影」は羽衣（張竹君）の著作と活動について詳述し、「民族解放は婦女解放の先決条件である」という。また鳳子の署名による「賽金花」特集は、当時上演された夏衍の戯曲を取り上げたもので、夏衍、洪深、鄭伯奇、楊翰笙、田漢、張若英が書いている。いずれも左聯のメンバーである。

ところが方針が変わったようで、封禾子は姚名達から経営の継続困難を理由に編集からはずされた。彼女は次号（4：11）から編集責任がないことを明記して去った。（4：10、「封禾子啓事」p.77）11期からは高雪輝になり、革新的な文章が少なくなった。「左寄りでなく右寄りでなく」という趣旨が、「左寄り右寄り」と左右に大きく振れているのである。

表[5]

筆名	発行年月日	卷期	類 別	題 名
趙清閣	19330615	1.4	文藝境界 (小説)	K女士
趙清閣	19330615	1.4	文藝境界 (詩)	自殺
趙清閣	19330715	1.5	讀者通訊	一定會受鼓勵而振興起來 婦女或則會被妳們的刺激而覺悟
趙清閣	193402 <sup>27)</sup>	2.3	婦女生活	蘇俄婦女的革命功勳
趙清閣	193402 <sup>27)</sup>	2.3	散文	京滬遊記
趙清閣	19340515	2.4	詩(作曲)	慰
趙清閣	19340515	2.4	散文	京滬遊歷記
趙清閣	19341201	2.1	文藝境界 (散文)	吊兩位短命的朋友
趙清閣	19350101	3.1	文藝境界 (小説)	雙影
趙清閣	19350501	3.5	時事評論	關於阮玲玉自殺與劉景桂之殺人
趙清閣	19350501	3.5	詩歌	清明郊外 仅仅地祈求一件
趙清閣	19350609	3.6	傷心之頁	弔新勉姊
趙清閣	19350900	3.9	女月文藝 (詩歌)	月
趙清閣	19360101	4.1		我對本刊前途的展望
趙清閣	19360101	4.1		愛國救國匹婦有責
趙清閣	19360101	4.1	詩歌	創造新生
趙清閣	19360215	4.2	小説	祖母
趙清閣	19360308	4.3		現代婦女對於職業生活應有的認識
趙清閣	19360308	4.3	劇本	復仇
趙清閣	19360410	4.4		怎樣救濟女子失學的痛苦
趙清閣	19360504	4.5	心勉週忌紀念祭	勉姊何日歸來
清閣	19331215	1.10	文藝境界 (詩歌)	靈魂失去了喲 苦惱
清閣	19340115	2.1	文藝境界	京滬遊歷記
清閣	193402 <sup>27)</sup>	2.3	批評與希望 (讀者的話)	愛護者的血和淚
清閣	19340601	2.6	文藝境界 (詩)	勸節約
清歌	19360215	4.2		一年來的中國文壇
清閣	19360215	4.2		二十四年婦女大事特寫
清	19360308	4.3	社評	休矣!林語堂
清閣	19360308	4.3	詩歌	毀滅
清閣	19360410	4.4	小説	火

表[6]

筆名	発行年月日	巻期	類別	題名
封禾子	19360901	4.9		中國婦女反帝運動史述略
封禾子	19361001	4.10		晚清“社會婦女活動”翦影
鳳子	19360901	4.9	賽金花特輯	關於賽金花的小説與戲曲

1937年7月『女子月刊』は予告なしに停刊した。姚名達は郷里に帰って以後、日本軍の進撃に遭遇し、命を落とした。『女子月刊』の刊行において左寄りになることを避け、右に偏ることを避けていたが、厳しい時代にあってはそれを貫くことはできなかった。少なくとも激しい政治運動の方針を達成するために、組織化された女性運動の圏外で、右でも左でもないフェミニズムだけを標榜した女性雑誌を刊行維持することは、個人の経済力では不可能だったといえよう。(未完)

#### 注

- 1) 本稿作成後、李曉紅《女性的声音—民国時期上海知識女性与大衆伝媒》(上海, 学林出版社, 2008年9月)を入手した。視点は異なるが、重なる部分が散見される。またWeb上で台湾の修士論文で『女子月刊』を取り上げたものがあることを知ったが、未見。
- 2) 前山「女性定期刊行物全体からみた『婦女雑誌』—近現代中国のジェンダー文化を考える一助として」(『『婦女雑誌』からみる近代中国女性』所収)
- 3) 黄心勉は3月8日の創刊に関して、次のような説明をしている。「創刊号を3月8日国際婦人デーに発行したので、或いは共産党の機関誌と疑われるかもしれないが、婦人デーに発刊したのは、中国には特定の『婦人の日(婦女節)』がないため、国際婦人デーを借用したに過ぎない。その日は第三インターが決めたものだが、我々は決して第三インターの命令を受けてこの雑誌を作ったのではない。」(『女子月刊』2:1, p.142)
- 4) 後に女子文庫から黄心勉の名で単行本にまとめて『中国婦女的過去和未来』を出す。
- 5) 姚名達「黄心勉女士伝」『女子月刊』3:6, p.4429
- 6) 後の『女子月刊』誌上には、投稿者に対して原稿料を取りに来るように、という記載がある。
- 7) 心勉「女子書店の第二年」『女子月刊』2:4, (『心勉偶存』pp.106~108)
- 8) 「女子書店の第一年」『女子月刊』1:2, p.275 (『心勉偶存』pp.95~96)
- 9) 編者「巻頭語 我們的態度」『女子月刊』1:2, p.3 (『心勉偶存』p.8)
- 10) 『婦女之友』は半月刊、北京で1926年9月~27年3月、中国共産党北方区委員会と国

民党北京特別市党部の共同刊行物として、計12期刊行された。共産党側の編集者は張挹蘭。

- 11) 呂雲章については、李又寧編『近代中華婦女自叙詩文選 第一輯』台北、聯経出版事業公司、民国69（1980）年6月、pp.349～490参照。
- 12) 題字について黄心勉は「第9期以降は永久に于右任先生の題したものをを用いる」と述べている。（1：8「我們的希望」、『心勉偶存』p.28）
- 13) この時には『小説月報』『教育雑誌』も同様に再刊されず、『東方雑誌』の「文芸」「教育」欄がそれぞれ代替することになった。
- 14) 鄭彭年、2001、p.65
- 15) 「現階段的中国婦女」『婦女生活』創刊号（1935年7月）、pp.7～10
- 16) 金仲華は以後専門に女性問題に言及した文章を書いていない。
- 17) 心勉「我們的前途」1：6、p.3
- 18) 郝李芳「編輯以後」1：6、p.6
- 19) 関露については、拙稿（『中国女性史研究』第3号、pp.2～19）を参照されたい。
- 20) 陳媛（1917～ ）本名は陳淑媛、陳宏、後年用いた莫耶のペンネームは有名。劇作家。1937年上海救亡演劇第五隊の編集、「七七」事件後、延安へ行き抗日軍政大学、魯迅芸術学院で学ぶ。44年以後は新聞や雑誌の編集者や記者となり、79年に中国作家協会に加入、甘肅省文聯副主席。主なシナリオ作品集に『晚飯前後』『生活線上的一群』『火花』などがある。
- 21) 婦女協進会は1930年に出された国民党の女性運動指導方針の下で組織された女性団体の1つ。当時上海市以外に開封市など河南省の各地にできた。上海市婦女協進会は1934年3月に金光楣が中心となり、7月には務本女子中学で76人の発起人により、9人の委員を選んで準備会を設立。10月22日に成立した。社会奉仕を趣旨とし、女性への職業紹介、救済などを主な活動とした。（「特載上海市婦女協進会籌備成立經過情形」など。3：1、pp.3619～3625）
- 22) 劉王立明主幹の『女声』3：4（1934年11月3日）には次のような記事がある。「女子書店出版の『女子月刊』は、編集名義は姚名達および夫人の黄心勉であるが、実は編集は毎期一人で、編集及び投稿は完全なボランティアである。最近婦女協進会がすでに人を派遣して『女子月刊』を引き継ぐことで話が進んでいる。」  
また『女子月刊』3：1の社告には、黄心勉と姚名達が社を維持し、陳媛の主幹に新たに金光楣と趙清閣を編集委員に迎え、5人体制で運営することを明記している。（p.3631）

- 23) 初めて詩を投稿したのは『河南民報』副刊で、原稿料を得た。16歳（1930年）の時であった。
- 24) 黄心勉「本社充実戦闘力」『女子月刊』1：7
- 25) しかし他方、趙清閣は、天一電影公司で知り合った陳立夫、張道藩、王平陵などが国民党員であったことから、後の文化大革命時期に問題視された。（張彦林、2005、p.15）
- 26) 『婦女文化』は、1936年8月15日に創刊。翌9月に2期を出した後は、経費が続かず、37年3月8日に「新編第1巻第1期」を刊行、この間の状況については、同期に掲載された趙清閣の「革新感言」や王立文の「本刊今後の任務」、任培道の「現階段的婦女運動」から知ることができる。以後7月まで第5期を出す。同年11月からは誌名が『婦女文化戦時特刊』（第1期～第2巻15期）、編集主幹が徐闔瑞となる。
- 27) 正しくは193403で1934年3月付けの刊行。

### 参考引用文献

- 張彦林『錦心秀女趙清閣』鄭州、河南人民出版社、2005年6月
- 黄心勉『心勉偶存』上海、女子書店、1935年2月
- 鄭彭年『宋慶齡和她的助手金仲華』北京、新華出版社、2001年1月
- 当該編集委員会編『華夏婦女名人詞典』北京、華夏出版社、1988年3月
- 李又寧編『近代中華婦女自叙詩文選 第一輯』台北、聯經出版事業公司、民國69年（1980年）6月、pp.349～490
- 当該編纂委員会編『上海婦女志』上海社会科学院出版社、2000年7月
- 陳三井主編『近代中国婦女運動史』台北、近代中国出版社、民國89年1月
- 夏曉虹選編『『女子世界』文選』貴陽、貴州教育出版社、2003年8月
- 張承宗篇、上海文史資料選輯第84輯『金仲華記念文集』上海市政治協商會議文史資料編集部、1997年1月
- 劉王立明『中国婦女運動』上海、商務印書館、民國23年（1933年）6月
- 中華全国婦女連合会編著、中国女性史研究会編訳『中国女性運動史1919—49』東京、論創社、1995年1月
- 村田雄二郎編『『婦女雜誌』からみる近代中国女性』東京、研文出版、2005年2月

（附）『女子月刊』巻期順目次及び執筆者索引（紙幅の都合上省略）